Die Eiche ディ　アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche Gesellschaft der Präfektur Chiba
〒270-2214松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456
Mail: info@jdg-chiba.com
協会Home Page

2023年ドイツ軍人慰霊祭
－日独友好の証として29回目の開催－

世界では、ソ連のウクライナ侵攻、イスラエル・ハマス戦争など国家間紛争で、今も多数の軍人や民間人が尊い命を亡くしております。早い終息を願う中、11月5日、第29回ドイツ軍人慰霊祭が当協会の主催により、午後3時より船橋市営習志野霊園で営まれました。今回は、津田沼高等学校オーケストラ部が山岡健担当教諭を含め、44名が慰霊祭に参加協力してくれた他、京華中学・高等学校（東京都）歴史研究部の部員15名も本慰霊祭に参列する等、津田沼高等学校オーケストラ部の父兄も含めた老若男女、総勢130名以上の方が参列する大規模な慰霊祭となりました。

当日は、植松事務局長の開会の辞に続いた厳粛な黙とうに始まり、ドイツ・デレゲーションも大絶賛しました津田沼高等学校オーケストラ部の演奏によるドイツ国歌の斉唱や追悼曲の演奏が慰霊祭のムードを終始、盛り上げてくれておりました。

来賓として、ドイツ国関係で、Dr.クレーメンス・フォン・ゲッツェ駐日大使が昨年に引き続き参列された他、ドイツ大使館より、武官ペルズィッケ大佐他2名、ドイツ本国よりドイツ連邦軍戦力基盤軍総監マーティン・シュルアイス中将他3名等、総勢8名の皆様に参列いただきました。さらに地元関係機関より、自衛隊第一空挺団田中保和第一科長および新井直樹広報班長、千葉県総合企画部国際課木村洋志課長 、船橋市杉田修副市長他2名、習志野市より諏訪晴信副市長、小熊隆教育長、高橋基之習志野自治会長に参列いただきました。

式典の冒頭、金谷会長が追悼・慰霊の辞において、来賓、参列者および今回の慰霊祭に協力をいただいた津田沼高等学校オーケストラ部への謝辞を述べると共に、ドイツ関係者が多数参列する中での慰霊祭が挙行できることの喜びを述べられました。

次に、フォン・ゲッツェ駐日大使がご挨拶。慰霊祭の開催および墓地の手入れ・管理に対する当協会、関係機関および地元の方々への謝辞を述べるとともに、「この墓地でドイツ人俘虜兵士と共に眠る俘虜収容所所長の西郷寅太郎（西郷隆盛の嫡男）中佐の御霊に拝礼をできることを光栄に思う」というお言葉がありました。さらに「最近の地政学的に困難な時期に日本とドイツが機密な連携をとっていくことは両国の関係のみならず、世界的にも非常に重要なことである。その証として、この慰霊碑があるのです。」と述べられておりました。

その後、千葉県、船橋市、習志野市の各代表者からのご挨拶の後、御霊の紹介として、当協会会員でもある本名龍児海上自衛隊1等海佐が、墓下に眠るドイツ兵士30名全員の名前と死亡時の階級を読み上げました。最後に、フォン・ゲッツェ駐日大使およびドイツ連邦軍総監マーティン・シュルアイス中将による大花輪の献呈があり、続いて、津田沼高校オーケストラ部による'Ich hatt' einen kameraden' などの追悼曲の演奏が流れる中、参列者全員で慰霊碑の前に白菊をささげ、30名のご冥福を祈りました。

引き続き予定されていた直会は、陸上自衛隊第一空挺団のご配慮より、今回は幹部食堂で行われました。初めての会場ながら、設営準備におきましても、団員の方のきめ細かいサポートをいただき、スムーズな会の進行ができました。

直会開会の簡単な挨拶が金谷会長より述べられた後、ドイツ連邦軍戦力基盤軍総監マーティン・シュルアイス中将より謝辞および挨拶が次のように、「今、世界は地政学的に困難な時期を迎えている。そのような状況下では、友好国が緊密な連携を継続的に取っていくことに意味がある。今回の訪日にあたり、防衛省統合幕僚長との面談も予定されている。その面談の前に、今回の慰霊祭の参列ができたことは、日独両国の関係強化の意味でも非常に有意義であった」と述べられておりました。

直会の締めとして、木戸副会長より、今回の式典への臨席への御礼と共に、「来年は、30回目の慰霊祭」であることを強調し、「来年も元気で再会できることを祈念する」という言葉で今回の慰霊祭は終了いたしました。

(理事: 坂田 博)

Düsseldorf奨学生歓迎会

4年ぶりに開催

- 理事　竹内　優-

事務局長司会、会長挨拶

10月12日(木）、船橋のオリエンタルビストロSAHARAにてデュッセルドルフからの奨学生の歓迎懇親会が行われました。本会には当会会員の他、10月1日から28日まで約1ヶ月間日本に滞在したSTIFTUNG “Studentenfonds Düsseldorf - Japan“（デュッセルドルフ独日奨学財団）主催”Japan Erleben”（日本体験）の奨学生6名、ユ ハン・マイヤーさん、デュハン・パザシュさん、アリアン・ラマツァイさん、レオニー・レムタさん、ザーリ・ロムバッハさん、アンドレー・シェーネさん、引率者で独日文化交流育英会・独日協会アム・ニーダーライン所属のピア智子・マイト氏、さらに偶然日本を訪れていた独日協会アム・ニーダーライン会員のヴィンセント・フロイデンライヒさん、イヴォンヌ・ダニッシュさん、その他にも千葉県国際交流推進室の職員3名が出席しました。

日本語、ドイツ語、英語が飛び交う会場

奨学生の来日はコロナの影響で4年ぶりとなり、毎年懇親会を開催していた当会もこの日を大変心待ちにしていました。ドイツ人と直接交流できる、ドイツ語を使って会話ができるという貴重な機会だけあって、開始前から会場の各所で期待に満ちた表情が見受けられました。

和やかな雰囲気の懇談会

懇親会は植松事務局長の日独両言語の司会によって進行が行われました。金谷会長による開会の挨拶のあと、笹生健司様による乾杯のご発声と共に幕が開けました。その後引率者のピア智子・マイト氏の通訳も交えて、奨学生6名、独日協会アム・ニーダーライン会員2名による自己紹介が行われました。ほとんどが初めての来日で、日本語学習歴も短い中、日本語を交えて自己紹介をする様子は心温まる瞬間でした。食事を囲みながらの楽しい歓談の時間はあっという間に過ぎ、締めくくりには奨学生6名の名前を漢字で記した色紙が各奨学生に手渡されました。6名は思わぬプレゼントに大いに喜んでいるようでした。

覚えたての日本語で自己紹介

自分の名前の漢字表記に驚き

コロナ禍を経て4年ぶりに開催された歓迎会は成功裏に幕を閉じ、改めて日独交流、対面での交流の重要さを肌で感じました。懇親会では参加者の笑顔や楽しんでいる様子が印象的で、短い時間ながらもお互いの仲を深められたのではと思います。当会の恒例行事であり目玉の一つでもある本懇親会が、今後も長くにわたり開催されることを心より願います。

青壮年部ドイツ語/ドイツ文化研究

ドイツ語の学び方

- 理事　草本 晶-

ドイツ語に限らず、外国語を学ぶときには何が必要でしょうか？　まず思い浮かぶのは、参考書、辞書、ノート、単語帳を揃え、毎日少しでも机に向かって勉強の時間を取ることでしょうか？　あるいはドイツ語を教えてくれる先生のところに定期的に通うイメージでしょうか？

最近の外国語教育研究においては、プロジェクトベースあるいはタスクベースと呼ばれる学習法が注目を集めています。これは、たとえば「おいしいドイツ料理のお店を紹介する」とか「ドイツと日本の学校制度の違いについて調べる」といったプロジェクトを設定し、最後のアウトプットの形（ポスター、プレゼンテーションなど）もあらかじめ決めて、グループで協力しながら目的を達成し、その成果を形に残すという方法です。

ここで重要なのは、グループで互いに協力して、作業する際に可能な限り目標言語であるドイツ語を使用するという点です。それによって、実際にドイツ語を使いながら学ぶことができ、さらには互いに協力して学び合うことで、連帯感を通じたコミュニティを形成できます。そうすると「ドイツ語を学ぶのは楽しい」と感じられ、継続して学びやすくなります。従来の「一人で」「文法を一つずつ着実に」「テストでよい点数をとるために」学ぶ方法とは、全く違いますね。この時教員は、知識を伝授するのではなく、学習をサポートする役割を担います。

では、教室でではなく、個人で学ぶ場合はどうでしょうか？　学ぶ目的によって学習方法も変わりますが、独学で学ぶ場合は、やはり文法をしっかりやって基礎を固めたいという方も多いでしょう。一方で、単語を暗記したり文法規則を覚えたりするのが苦手な人にとって文法学習は決して楽しいものではありません。学習の目的が、とりあえず旅行などで現地に行ったら標識ぐらい理解できるようになりたい、簡単な挨拶やコミュニケーションくらい取れるようになりたい、ということであれば、実は必ずしも文法を勉強する必要はありません。

文法を学びたい人も、コミュニケーションできるようになりたい人も、おすすめは音読をたくさんすることです。いまは、動画やスマートフォンのアプリなどで、いくらでもドイツ語の発音を確認できる方法はあるので、そういったものを利用して、とにかく声に出して言ってみる、何度も繰り返して言ってみる、というのが実は上達への早道です。

他にもいくつか学習のコツがありますが、詳しい話は年明けの講演会でお話ししたいと思います。どうぞお楽しみに！

青壮年部ドイツ歴史研究

-オンライン講演会「映画で観るドイツ近現代史」報告

10月29日、青壮年部ドイツ歴史研究会にて東京女子大学・歴史文化専攻教授の柳原先生にお越しいただき、こちらのオンライン講演会を開催しました。協会内外約60名が参加し、講演後の質疑応答時間では、沢山の方から質問と意見が寄せられました。青壮年部ドイツ歴史研究では、映画を通したドイツの歴史観を得ることに意味があるであろうということから、ドイツ史の専門家でおられる柳原先生に講演のご相談をしました。

冒頭、柳原先生より、映画と歴史の相乗効果についてご説明があり、歴史を知っていれば、映画の背景・演出の意味が分かり、映画を観ると、歴史について知りたくなる。この相乗効果が期待できるのではからご説明されました。

テーマは、大きく3つで構成されていました。

●「西部戦線異状なし」について制作年（1930，1979，2022版）毎のそれぞれの映画の持つ主題の相違点

●Bruno Ganz出演映画作品だけでドイツ近現代史がわかる。

●ヒトラー映画の時代的変遷

どのテーマも非常に興味深かったです。西部戦線では、若者の大量死のフォーカスから、権力への批判、最新版では、大きな権力に巻き込まれた場合の無力、繰り返される戦争による死の循環、ウクライナ戦争の状況とも重ね合わせるフォーカスとされました。Bruno Ganzの映画では、「17歳のウイーン」では、38年のオーストリア併合までのナチズムの浸透のナチの科学と非科学（反ユダヤ）の統合による人心の誘導を紹介されたり、ヒトラー映画では、最初、ヒトラー自身は、対象にはならなかったが、人間ヒトラーの描写、そしてヒトラー無き後の世界でにも独裁的な支配構造に人間は弱いとする映画の紹介などあり、示唆にとんでました。有名なWannsee会議が、ユダヤの人々の移送と「最終的解決」の方針と所轄を決めた会議であって「最終的解決の決定ではないという説明は、新しい事実を知るに至りました。20以上の映画と背景のドイツ史上の注目ポイントのテンポ良いお話は、とても示唆に富む内容でした。
（常任理事: 勝見 浩明）

オンライン講演会「映画で観るドイツ近現代史」 所感

講演会に参加された後、ドイツ関連映画を観てみよう、と思った方は少なくないのではないでしょうか。1980年代に映画におけるホロコーストや、2000年代以降ヒトラー像の描かれ方が時代の経過と共にそれぞれ変遷しているお話は大変印象的でした。

今月（12月3日-） 日本で上映される「メンゲレと私」は、講演会の中でもご紹介がありました。この映画は、ウィーンを拠点とするプロダクション制作による「ホロコースト証言シリーズ」第3弾となる最終作品です。「ホロコースト証言シリーズ」では、第2次世界大戦の経験者が一人の語り部として登場し、異なる立場からそれぞれの戦争の記憶を証言しています。インタビューの合間に挟まれる様々なアーカイブ映像、戦時中のドイツやヨーロッパ各国の社会状況が理解できる構成となっている貴重な作品の一つです。

（常任理事: 本間　実里）

デュッセルドルフとの交流

ドイツと私

ドイツと私 － 笹生　健司

クリスマスツリーと筆者

随分前のことになりますが、大学でドイツ語を勉強しました。名誉会長の宗宮先生にも教わり、ゲーテの「ファウスト」の寸劇などをしたのを覚えています。けれどもドイツ語はとっつきにくく、また、不真面目な学生であった私の取り組みは中途半端なものでした。

社会人になってしばらくドイツ語から遠ざかっていましたが、ジェトロ・デュッセルドルフセンターでの研修の話があり、希望しました。1年という短い期間でしたが、大学で習ったドイツ語をなんとか使い、リアルなドイツ生活を堪能しました。夏休みには車を運転してスイスまで出かけたりしました。

その後、だいぶ経って県庁で国際課に配属になりました。“Partnerstadt” であるデュッセルドルフ市との交流にかかわることになり、毎年同市で開催される「日本デー」に出展しました。当時のデュッセルドルフ市長は、SPDのトーマス・ガイゼル氏でした。私は「ちばアクアラインマラソン」を５回完走していますが、ガイゼル氏もマラソンランナーであったので、市長が来葉したときにこの海の上を走るマラソンの説明をして参加をお願いしましたが、スケジュール上出場はかないませんでした。

ライン川とデュッセルドルフ

また、マイトさん率いるデュッセルドルフ市周辺からの奨学生を毎年受け入れました。こんなにもたくさんの若いドイツ人が日本に関心を寄せていることに毎回驚いています。何よりも若い、あるがままの彼らと話すのはとても楽しいことです。結構な歳になってもまだ勉強している若者もいます。一方で、日本のアニメファンも多く、今年も「Dokomi」の関係者が２人来日しました。毎年千葉県として参加している「日本デー」でもアニメのコスプレをしたドイツ人がたくさんいてびっくりします。

私自身アニメに詳しくないので、彼らの話についていけませんが、ドイツにおける日本の受容のされ方は、年代によって全く違うと感じます。ときとして彼らは流暢な日本語を話します。好きというパワーは語学をかくも容易に習得可能なものにしてしまうのかとびっくりします。彼らは、アニメを丸覚えして日本語を覚えています。

最近では、ドイツ語のドラマもサブスクで見られるし、Zoomで会話もできるし、さらにAIが登場するなど一昔前とはドイツ語を学ぶ環境も大きく変わりました。古典である「ファウスト」の寸劇を丸覚えした頃とは別世界にいることをつくづく感じる日々です。

習志野ドイツフェア＆グルメフェスタ 2023 開催報告

-常任理事 本橋 緑 -

10月21日(土）と22日(日）にJR津 田沼駅南口モリシア前で「習志野ドイツフェア＆グルメフェスタ2023」が開催され、当協会はモリシア内1階センターコートで協会活動を紹介するパネルとバウエルンマーレライ（トールペイント）の展示を行いました。場所もよく、パネル前には常に来場者の姿があったという印象です。

会長のご挨拶

オープニングセレモニーでは協力団体として金谷会長がご挨拶され、また会員が所属する習志野第九合唱団とデュッセルドルフ日本男声合唱団のステージでは、アンコールが沸き起こり、大盛り上がりでした。

ドイツフェア会場全景

コロナ前に当協会でトールペイント教室の先生をしてくださった西川珠子様、またたくさんの会員、関係者の皆様、お手伝い、そしてご来場いただき本当にどうもありがとうございました。

最後に：今年のビール祭りを開催した船橋のバイエルンストゥーベbyダンケさんも同フェアに出展されていましたが、なんと当協会にご入会していただきました!!

いちかわドイツデイ 2023 開催報告

-常任理事 吉川 三朗 -

今年の「いちかわドイツデイ2023」は、さわやかな秋晴れのなか、10月7日（土）午前11時から恒例のニッケコルトンプラザにて4年ぶりに屋外で開催されました。

アルプス音楽隊を楽しむ観客

イベントの内容は、市川市がパートナーシティを締結しているローゼンハイム市をはじめとするドイツの文化を、食や音楽を通して紹介するもので、ドイツビール・ソーセージ・ワインなどの飲食物やドイツ雑貨販売のほか、アルプス音楽隊による演奏や両市交流の紹介など盛りだくさんの内容でした。

当日は、会場一杯に家族連れや仲間達がビールやソーセージを食べながらわいわいがやがやと楽しそうな光景でした。

協会の展示会場の様子

当協会のブースは、コルトンプラザ南階段を上がったところの踊り場で、音楽隊の演奏を南階段で座って見る来場者が集まる場所で、展示写真には100人以上の方が見えられ、会員から説明を受け、なかには入会を希望される方もいましたので嬉しい限りです。

書籍/Buch

ご紹介する図書（相澤啓一／ケルン日本文化会館編『共通の課題：独日学術交流へのアクチュアルな展望』）は、ケルン日本文化会館の相澤前館長（今年3月で任期を終え、現在は独協大学教授）の編集によるドイツ語の書籍です。「日独友好160年」を記念して、ケルン日本文化会館が、ボン大学、ケルン大学と共同で実施したシリーズ講演会（2021年、2022年実施）の内容を図書にしたものです。

2021年夏学期のシリーズでは、日独の研究者による共同研究の成果が中心になっています。2022/23冬学期のシリーズでは、「現在の共通課題に関する日本からの異文化間研究貢献」がテーマになっています。両者あわせて、19本のドイツ語論文が所収されています。

紙幅の関係から、筆者がその一部を視聴した2021年のシリーズの論文タイトルを日本語に訳すと次のとおりです。「75年間変わらない日本の憲法」「東アジアにおける労働世界の変化と変遷」「経済的、社会的不安定性の時代の日本における学校から労働への移行」「国際司法裁判所と文化財保護」「植民地の略奪美術品と国家のアイデンティティ」「中世及び近世のドイツ文学と日本文学における男性の原型」「外国語としての日本語の教員養成におけるデジタル化」。読者は、本書をとおして、日独の学術交流の現状を包括的に知ることができるでしょう。

（副会長：木戸裕）

図書紹介：AIZAWA, Keiichi / Japanisches Kulturinstitut Köln (Hg.) Gemeinsame Herausforderungen:Ein aktueller Blick auf den deutsch-japanischen Wissenschaftsaustausch anhand von Beiträgen aus den Ringvorlesungen 2021 und 2022, München：Iudicium, 2023.（ISBN 978-3-86205-645-3）

今後の予定

■青壮年部-ドイツ歴史研究会-オンライン無料（別途、ご案内）

日時:　12月17日　18:00-19:30
旧ドイツ領の今
ベルギー、デンマーク、ポーランドの国境地帯を巡って
～歴史の記憶とアイデンティティの形成～
神戸大学大学院国際文化研究科　衣笠先生（会員）

■第45回習志野第九合唱団定期演奏会

日時:　12月24日 詳細は、別途ご案内致します

■新春講演会

日時:　2月3日 15:30-17:00　中央公民館　講師　草本理事

会員情報

個人会員　古川 謙也 さん　江戸川区
恵川 申梧 さん　松戸市
沼﨑 星悟 さん　稲敷市

法人会員　医療法人 同和会　千葉病院、社会福祉法人清和会、（株）京葉ビル管理、（株）和幸電気工事、バイエルンストゥーベ by ダンケ

編集後記

今年のドイツ軍人慰霊祭は、実行委員のメンバーの綿密な準備により、ドイツからの例年より多い参加メンバー交え、ドイツ軍人慰霊祭を滞りなく実施できたと同時にドイツ大使、武官を中心として協会とのつながりも深まったと思いました。協会活動も年初に掲げた計画に基づき、ほぼ予定どおりの内容で計画が履行されていると思います。2023年度は、来年3月まであります。青壮年部の活動一つをとっても着実に取り組みが行われるよう努めたいと思います。今月誌面の都合上、会員の協会へのリクエストを掲載できませんでした。次号行います。勝見